

劣等感の構造(2)

—YG 性格検査の分析—

安 塚 俊 行

The Structure of Inferiority Feeling (2)
—An Analysis of the YG Personality Inventory—

Toshiyuki YASUZUKA

Abstract

In the previous study, four types of inferiority feeling were found in the students of a nursing school. It was also suggested that the inferiority feeling concerning her own personality impeded the smooth interpersonal relationship. Therefore, this study attempted to analyze the inferiority feeling from the personality disposition. One hundred and forty-nine students were asked to answer the Yatabe-Guilford personality inventory. This test consists of twelve scales. The scores of sixty-eight students were correlated each other. After 12×12 correlation matrix was computed, the factor analysis was carried out. Three factors were extracted and they were respectively named emotional adjustment, social activity, and thinking version. *T*-test between the high inferiority feeling group and the low inferiority feeling group showed significant differences at many scales. The former were more depressive, emotionally unstable, nervous, subjective, uncooperative, inactive, thinking introverted, submissive, and socially introverted than the latter. From this study, four problems were pointed out. First, the technique of the factor analysis used and the nature of the factors extracted were examined in comparison with other studies. Next, the correlation of six scales posed a question of the independence of the inferiority scale. Thirdly, the relationship between inferiority feeling and self-esteem was discussed. Finally, the necessity of counseling to the high inferiority feeling group was emphasized.

目 的

前回の報告では、まず「劣等コンプレックス」を提唱したアドラー (Adler, A.) の経歴と理論について概観し、次に看護専門学校生 (女子) の抱く劣等感を作文を基に検討した。その結果、女子青年には、自己の身体・容貌に対する劣等感、自己の能力に対する劣等感、家族・友人に対する劣等感、自己の性格に対する劣等感などがあることが明らかにされた¹⁾。中でも自己の性格に対する劣等感の記述は最も多く、この時期の女子の対人関係に大いに影響していると考えられた。そこで今回は、彼らの劣等感を性格の構造という観点から分析することによって、社会的適応の手がかりを得ようとした。

方 法

被検者——都内の看護専門学校生で、1981年度1年生68名 (前回の報告と同一の被検者) 及び1982年度1年生81名 (18歳—70名, 19歳—7名, 20歳以上—4名) である。

性格検査——矢田部・Guilford 性格検査 (以下 YG 検査と略す) を下記の通り実施した。

1981年度生——1981年5月15日

1982年度生——1982年4月30日及び5月6日 (この年の被検者には「初めて劣等感を持ったのはいつ頃、どのような場面であったか」という作文も課しているが、その分析は別の機会に譲ることとする)

YG 検査は、抑うつ性 (D)、回帰性 (C)、劣等感 (I)、神経質 (N)、客観性の欠如 (O)、協調性の欠如 (Co)、愛

Table 1 Mean and standard deviation of YG personality inventory

	D	C	I	N	O	Co	Ag	G	R	T	A	S
M	8.9	9.0	7.8	7.6	8.0	5.5	10.9	12.7	12.6	10.5	12.0	15.5
SD	5.09	4.83	4.30	4.53	3.08	3.59	3.71	3.64	3.85	4.40	4.28	3.08

想の悪さ又は攻撃性(Ag), 一般的活動性(G), のんきさ(R), 思考的外向(T), 支配性(A), 社会的外向(S)という12の尺度から成る質問紙である。各尺度の得点の範囲は0~20点であり, 以下の分析にはこの得点が用いられた。

結 果

1) YG 検査のプロフィール

1981年度生(N=68)にYG検査を実施したところ, 各尺度の算術平均(M)と標準偏差(SD)は表1のようになった。またそれを図示したのが図1である。

12尺度のうち8尺度が1~5の標準点で3に位置しており, R, T, A, Sは標準点4である。従って系統値による判定結果はA'型すなわち平均型であり, 特に偏りのある被検者ではないことが確認された。

2) YG 検査の相関行列

次に, YG 検査の下位尺度間の相関係数(Pearsonの r)を求めたのが表2である。相関行列の対角線上には, 後の因子分析のために共通性の squared multiple correlationを入れてある²⁾。これによると, 相互相関の高い尺度群

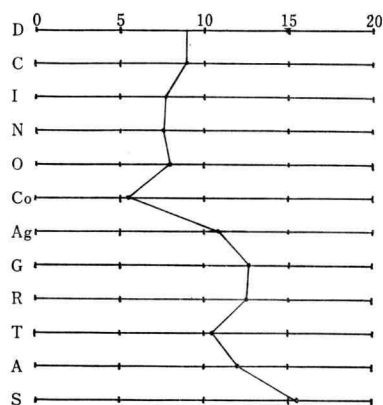


Fig. 1. Profile of YG Personality inventory (N=68)

は, D, C, I, N, O, Co 群と Ag, G, R, A, S 群の2つであり, T尺度は独立している傾向がうかがえる。その点を明らかにするために次に因子分析を試みた。

3) YG 検査の因子分析

2)において3因子の存在が示唆されたので, 表2の相

Table 2 Correlation matrix of 12 scales of YG personality inventory

	D	C	I	N	O	Co	Ag	G	R	T	A	S
D	.635	.451	.527	.641	.521	.286	-.042	-.283	-.013	-.501	-.273	-.297
C	.451	.655	.547	.591	.642	.367	.306	-.047	.387	-.069	-.050	-.025
I	.527	.547	.607	.631	.496	.402	-.081	-.293	.038	-.165	-.465	-.425
N	.641	.591	.631	.682	.470	.470	.091	-.087	.119	-.473	-.194	-.204
O	.521	.642	.496	.470	.565	.439	.123	-.137	.329	-.191	-.140	-.147
Co	.286	.367	.402	.470	.439	.350	.166	-.014	.183	-.136	-.224	-.215
Ag	-.042	.306	-.081	.091	.123	.166	.445	.343	.464	.026	.374	.228
G	-.283	-.047	-.293	-.087	-.137	-.014	.343	.461	.190	-.146	.384	.504
R	-.013	.387	.038	.119	.329	.183	.464	.190	.510	.163	.367	.411
T	-.501	-.069	-.165	-.473	-.191	-.136	.026	-.146	.163	.624	-.168	-.005
A	-.273	-.050	-.465	-.194	-.140	-.224	.374	.384	.367	-.168	.755	.777
S	-.297	-.025	-.425	-.204	-.147	-.215	.228	.504	.411	-.005	.777	.727

Table 3 Factor matrix (before rotation)

	F1	F2	F3
D	.748	.035	-.291
C	.651	.450	.238
I	.785	-.062	.094
N	.780	.229	-.215
O	.670	.299	.141
Co	.519	.168	.114
Ag	-.015	.587	.184
G	-.324	.471	-.156
R	.055	.658	.350
T	-.325	-.172	.740
A	-.490	.681	-.232
S	-.504	.663	-.124
Eigenvalue	3.634	2.310	1.027
Iteration	36	19	14

Table 4 Factor matrix (after rotation)

	F1	F2	F3
D	.580	-.244	-.500
C	.817	.122	.021
I	.680	-.384	-.140
N	.709	-.088	-.443
O	.743	-.014	-.073
Co	.551	-.069	-.050
Ag	.283	.522	.162
G	-.128	.575	-.068
R	.420	.542	.297
T	-.144	-.095	.808
A	-.206	.840	-.098
S	-.195	.819	.010
Eigenvalue	3.198	2.517	1.256
Proportion of variance (%)	26.65	20.97	10.46

関行列に因子分析の一技法である主因子法を適用した。なお計算は龐大になるので、田中のプログラムに修正を加え³⁾、CASIO-FX9000Pを使用した。表3は normal varimax 回転前、表4は回転後の結果である。

3因子まで抽出したところ、全分散に対する貢献度は 58.08% となり、6 割近くが説明されたことになる。更に、F1はD, C, I, N, O, Coに、F2はAg, G, R, A, Sに、F3はTに負荷していることから、前述の2)の見解が統計的にも確かめられた。ここでF1はその尺度内容から情緒的適応性、F2は社会的活動性、F3は思考的向性の因子と命名することにする。

4) 高劣等感群と低劣等感群の比較

I尺度に関して、1981年度生の第一四分位数を求めたところ $Q_1=3.88$ 、第三四分位数は $Q_3=10.60$ となった。同様に1982年度生のそれは $Q_1=3.66$ 、 $Q_3=12.51$ であった。そこで両方の被検者を合わせて、I尺度の得点が12点以上を高劣等感群(HI群)、4点以下を低劣等感群(LI群)とした。各群の平均と標準偏差および両群の間の平均の差の検定を行ったのが表5である。また図2は、表5の平均値をプロフィールに描いたものである。I尺度に有意差のあるのは当然であるが、その他の尺度においてもAgとRを除いていずれも高度に有意であった(両側検定)。従ってHI群はLI群に比べて、抑うつ性大(D)、気分の変化大(C)、神経質(N)、主観的

Table 5 Mean and standard deviation of the high inferiority feeling group and the low inferiority feeling group

		D	C	I	N	O	Co	Ag	G	R	T	A	S
HI (N=36)	M	12.7	11.8	14.6	10.6	9.9	7.0	10.1	10.4	12.4	9.5	9.4	12.9
	SD	5.07	4.36	1.87	4.38	3.33	3.40	4.24	3.57	4.28	4.46	4.79	4.10
LI (N=47)	M	5.0	5.5	2.9	4.0	5.6	3.4	10.8	14.9	12.6	12.3	14.6	17.4
	SD	4.19	3.63	1.23	2.92	2.56	2.61	3.48	3.36	3.72	4.22	3.69	2.43
$t(df=81)$		7.478	7.090	33.814	8.118	6.570	5.391	-.816	-5.813	-.225	-2.887	-5.519	-6.155
t -test		***	***	***	***	***	***	n. s.	***	n. s.	**	***	***

***... $p<.001$ **... $p<.01$

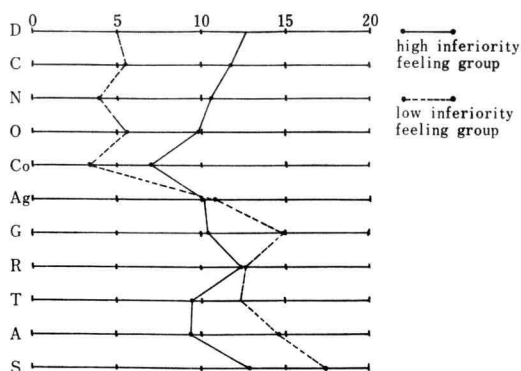


Fig. 2. Profile of the high inferiority feeling group and the low inferiority feeling group

(O), 非協調的 (Co), 非活動的 (G), 思考的内向 (T), 服従的 (A), 社会的内向 (S) であるといえよう。

考 察

以上の結果には次の4つの問題点が含まれていると考えられる。

第一に、資料の分析方法であるが、本研究では主因子法を適用し、情緒的適応性、社会的活動性、思考的向性の3因子を抽出した。これは辻岡の結果とは若干異なる⁴⁾。しかし因子分析につきものの諸問題——技法、因子の不变性、母集団⁶⁾——がここにおいても顕在化していると考えるのが妥当であろう。そこで差し当たりは、YG検査は上述の3因子から成る、あるいは矢田部の主張するように情緒性一般の適応性と広義の向性の2因子から成る⁶⁾としておき、今後の資料の累積を待つことにする。

第二に、高劣等感群と低劣等感群の差異についてであるが、ほとんどの尺度で有意差が見出された。しかし、劣等感が原因してそのような傾向を示すに到ったのか、あるいはその逆であるのかという因果関係については、簡単に結論を下すことはできない。そもそも D, C, I, N, O, Co 尺度が共変する一すなわち情緒的適応性因子——と自体、I 尺度の独立性に疑問を投げかけるものである。

第三に、これは第一および第二の問題とも関係するが、劣等感という概念をどのように位置づけるのかという、基本的かつ理論的にも重要な問題である。本研究では YG 検査の下位尺度の1つである I 尺度を基準にして検討した。しかし最近劣等感を self-esteem の下位

概念と考える研究者が多い。例えばローゼンバーク (Rosenberg, M.) は、「セルフ・エスティームとはセルフ・イメージの中核概念で、1つの特別な対象、すなわち自己に対する肯定的、または否定的態度である」と定義している⁷⁾。一方、星野は藤原の研究を踏まえて、自尊感情の高低、内的安定性—不安定性の組み合わせから、次の4つの類型を提唱している。

「自尊感情が高く安定している人は適切な劣等感をもつことが多く、自尊感情が低くても安定している人は適切な劣等感をもつことが多く、自尊感情が高い上に不安定な人は不当な優越感をもつことが多く、自尊感情が低い上に不安定な人は不当な劣等感をもつことが多い⁸⁾」

上の記述からは、優越感と劣等感が表裏一体であること、自尊感情が劣等感の上位概念であることが読み取れる。このような内外の研究を考慮すると、今後は劣等感の内容分析を推し進めると同時に、劣等感と他の諸概念との関係について考察することも必要であろう。

第四に、高劣等感群の者が抱えている劣等感にどう対処するかという治療上の問題がある。関は劣等感のカウンセリングの方法として、共感的理解、集団心理療法、コミュニティ・アプローチの3つを挙げている⁹⁾。そしてカウンセラーとしての体験から、次のような方策が有効であることを見出した。それは、劣等感の背後には優越感が潜んでいるのであるから、クライアントがカウンセラーになり、カウンセラーがクライアントから教えてもらう態度に出ればよいというのである。具体的には、「劣等感ですか。劣等感についてはわたしの方が悩んでいるのです。あなたはどのように劣等感にぶつかっているのか、参考のために話してくれませんか¹⁰⁾」と発言することによって相手を安心させ、コンプレックスの解消を目指そうとするのである。しかしながら、筆者の当面の研究課題は劣等感の構造把握であり、またそれなくしては適切な治療も行い得ないと思われる。従ってここではカウンセリングなどの手段を通して、劣等感から解放されることが究極の目標であることを指摘するにとめておく。

要 約

看護専門学校生 (女子) に対して矢田部・Guilford 性格検査を実施した。12の下位尺度間の相関行列に因子分析を行ったところ、情緒的適応性、社会的活動性、思考的向性の3因子が抽出された。更に I (劣等感) 尺度の得点順に被検者を並べ、上位の者を高劣等感群、下位の者を低劣等感群としたところ、前者は後者に比して、

抑うつ性大, 気分の変化大, 神経質, 主観的, 非協調的, 非活動的, 思考的内向, 服従的, 社会的内向であった。

最後に, 資料分析の技法, 劣等感の概念規定などに関する問題が論議され, 治療的アプローチの必要性が強調された。

付 記

田中の主因子解³⁾に本研究のデータを適用したプログラム・リストとその演算結果は次ページの通りである。ただし, 行番号 20, 210, 251, 260, 261, 262, 270, 320 には筆者による修正が加えられている。

文 献

- 1) 安塚俊行 1981 劣等感の構造 (1) 幾徳工業大

- 学研究報告 A 人文社会科学編 第6号 15-19
- 2) 芝 祐順 1972 因子分析法 東京大学出版会 165-178
- 3) 田中良久 1975 BASIC 入門—行動科学のためのコンピュータ・プログラミング入門— 東京大学出版会 112-116
- 4) 辻岡美延 1965 YG 性格検査実施手引 日本・心理テスト研究所 7-9
- 5) 清水利信・斎藤耕二 1960 因子分析法 日本文化科学社 119-128
- 6) 岡堂哲雄(編) 1975 心理検査学 垣内出版 271-273
- 7) 星野 命 1982 優越感の心理・劣等感の心理 青年心理 33号 金子書房 12-14
- 8) *ibid.*, 17
- 9) 関 計夫 1981 劣等感の心理 金子書房 259-269
- 10) *ibid.*, 262

```

10 REM PRINCIPAL FACTOR METHOD
20 REDIM A(12,12),B(12,1),C(12,1),D(12,1),E(1,12),F(12,12),X(1,1)
30 LET Z1=0
40 READ N,Z9,T1,E9
50 MAT READ A(N,N)
60 MAT B=CON(N,1)
70 MAT D=ZER(N,1)
80 LET E2=0
90 LET T2=0
100 MAT C=A*B
110 MAT E=TRN(C)
120 MAT X=E*B
130 FOR I=1 TO N
140 LET C(I,1)=C(I,1)/SQR(X(1,1))
150 IF ABS(D(I,1)-C(I,1))<T1 THEN 170
160 LET T2=1
170 NEXT I
180 LET E2=E2+1
190 MAT B=C
200 MAT D=C
210 IF E2>=E9 THEN 450
220 IF T2=1 THEN 90
230 MAT E=TRN(B)
240 LET Z1=Z1+1
250 PRINT " ***FACTOR";Z1;" EIGENVALUE";SQR(X(1,1));" ITERATION";E2
251 WRITE " ***FACTOR";Z1;" EIGENVALUE";SQR(X(1,1));" ITERATION";E2
260 MAT PRINT E;
261 MAT WRITE E;
262 WRITE
270 IF Z1=Z9 THEN 450
280 PRINT
290 MAT F=B*E
300 MAT A=A-F
310 GOTO 60
320 DATA 12,3,.0000001,500
330 DATA .635,.451,.527,.641,.521,.286,-.042,-.283,-.013,-.502,-.273,-.297
340 DATA .451,.655,.547,.591,.642,.367,.306,-.047,.387,-.069,-.050,-.025
350 DATA .527,.547,.607,.631,.496,.402,-.081,-.293,.038,-.165,-.465,-.425
360 DATA .641,.591,.631,.682,.470,.470,.091,-.087,.119,-.473,-.194,-.204
370 DATA .521,.642,.496,.470,.565,.439,.123,-.137,.329,-.191,-.140,-.147
380 DATA .286,.367,.402,.470,.439,.350,.166,-.014,.183,-.136,-.224,-.215
390 DATA -.042,.306,-.081,.091,.123,.166,.445,.343,.464,.026,.374,.228
400 DATA -.283,-.047,-.293,-.087,-.137,-.014,.343,.461,.190,-.146,.384,.504
410 DATA -.013,.387,.038,.119,.329,.183,.464,.190,.510,.163,.367,.411
420 DATA -.502,-.069,-.165,-.473,-.191,-.136,.026,-.146,.163,.624,-.168,-.005
430 DATA -.273,-.050,-.465,-.194,-.140,-.224,.374,.384,.367,-.168,.755,.777
440 DATA -.297,-.025,-.425,-.204,-.147,-.215,.228,.504,.411,-.005,.777,.727
450 END

***FACTOR 1 EIGENVALUE 3.63417197312 ITERATION 36
0.74787481761 0.651170972857 0.78529203817 0.780167041541 0.670172848804 0.518757288017 -0
.0151454927795 -0.324153334279 0.0550855377628 -0.324500326858 -0.489751095129 -0.503736877243

***FACTOR 2 EIGENVALUE 2.3099085791 ITERATION 19
0.0348624380184 0.449814915329 -0.0619562200916 0.2294421157 0.299129449948 0.167822547673
0.587085635191 0.471094970466 0.657752214176 -0.172497394883 0.680944983602 0.662989613053

***FACTOR 3 EIGENVALUE 1.02693769045 ITERATION 14
-0.291314032223 0.237598281193 0.0939241937964 -0.215363392427 0.141193038082 0.114392912633
0.184262359286 -0.156240564618 0.350451652237 0.739558827333 -0.231897573347 -0.124469631521

```